

学内広報

for communication across today



特集：■生まれ変わります！学内広報

2012.9.24

No. 1429



1968年、東大紛争中の教職員情報交換用資料として誕生した学内広報。以後、40年以上にわたり、教職員の情報共有・記録媒体として発行されてきましたが、来月10月号より大幅にリニューアルされることになりました！ここではそのリニューアルの概要とこれまでの軌跡を振り返ります。



リニューアル、その目的は？

学内広報はイベントのお知らせや報告、受賞記事など、各部局・各部署からの投稿記事を中心に構成されてきました。寄せられた原稿は基本的にすべて掲載し、毎号のページ数を決めずに発行していましたが、昨今の経費縮減により、現状の形態を維持することが難しくなっていました。

そこで、INFORMATION欄・NEWS欄については、紙面ではなく、即座に告知できて、検索やアーカイブのしやすいウェブサイトに発信の場を移すことになりました（INFORMATIONは次号より、NEWSは1月号よりウェブ移行）。今後、冊子の学内広報は特集ページを中心とする「教職員が知っておくべき情報」を集めた新しい媒体に生まれ変わります。



投稿先、変更へ！

学内広報は来月10月号より一部リニューアルし、1月より全面リニューアルいたします。それに並行して、全学ウェブサイトの改修を進め、今まで投稿いただいていた記事の投稿先を以下のように変更いたします。ご注意ください。



10月～12月号の投稿方法

学内広報記事区分	掲載先	投稿方法
NEWS	従来通り紙面に掲載。 (キャンパスニュースに限り、紙面より廃止。)	◆今までと同様にメールにて投稿。 ◆キャンパスニュースは、情報に応じて全学ウェブサイト各担当で更新。
INFORMATION	紙面より廃止。 <対象：学内教職員の場合> ⇒「東大ポータル」へ <対象：一般の方も含む場合> ⇒全学ウェブサイトの「Event Info」および「Latest News」へ	◆「東大ポータル」への投稿は「一斉通知」の入力（現状と同じ）。 ◆全学ウェブサイトへは「ニュース・イベント・リクルート登録システム」を使用。
計報	従来通り紙面に掲載。	◆今までと同様にメールにて投稿。

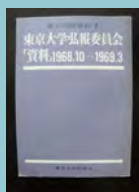


1月号以降の投稿方法

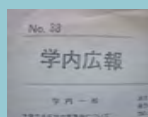
1月号以降は上記のすべてのページが紙面からウェブサイトに移りますので、投稿はこれから制作する「新ニュース登録システム」を利用いただくこととなります。こちらについては追ってお知らせいたします。



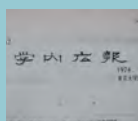
学内広報の誕生とその成長を振り返ります！



学内広報は1968年10月4日に、東大紛争における「教職員間の情報交換資料」として誕生しました。その名も「資料」です！



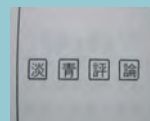
38号から「学内広報」という名前になりました。



252号から現在の題字デザインに変わりました。こちらは「前広報委員長代理・理学部森田先生のスケッチをもとにデザインしたもの」ということで、リニューアル後もこのデザインはそのままです。



300号から表紙に写真が掲載されるようになりました。いまの学内広報に近づいてきました。



301号から「淡青評論」がはじまりました！



それまでB5版だった学内広報が983号よりA4の大きさに！



新しい学内広報はこうなる！

新しい学内広報の内容

新しい学内広報は月刊で基本12ページのスリムな学内マガジン。シンプルかつ美しいデザインに生まれ変わります。もちろん、内容も一新。従来の学内広報は、学内の様々な出来事を主なトピックとするニュースメディアでしたが、新しい学内広報は、本学構成員ならぜひ知っておいてほしいトピック、本学の運営方針や本学が置かれている状況をつまびらかにした重要なトピックなどをお届けする、特集主体の読み物メディアとなります。入学時期の在り方に関する問題（いわゆる秋入学問題）を含む総合的な教育改革の話など、きわめて重要なトピックもどんどん特集していきますので、ご期待ください！

■特集（4ページ程度）

全学的な行事や大学の運営方針に関わる話題、全学的に重要な話題などについて、広報課を中心に記事を作成します。全教職員必読のページを目指します。

■TOPICS（2ページ）

全学ウェブサイトへ寄せられる「トピックス（旧学内広報のNEWS）」についてタイトルの一覧やハイライトを掲載し、1ヵ月の学内の動きを簡単に把握できるようにします。

■連載コラム（4ページ）

旧学内広報でも好評だった連載コラムページは健在。お楽しみに！

■淡青評論（1ページ）

1975年より続いている「淡青評論」は、従来通り、裏表紙に掲載します。

今後の学内広報のスケジュール

	発行	しめきり
8月		(8/30) 1429号 (9月号) 原稿締切・「INFORMATION」投稿受付終了
9月		(9/28) 1430号 (10月号) 原稿締切
10月	(10/31) 1430号 (10月号) 配布 《一部リニューアル》 20頁程度・「INFORMATION」廃止	(10/31) 1431号 (11月号) 原稿締切
11月	(11/30) 1431号 (11月号) 配布	(11/30) 1433号 (12月号) 原稿締切・「NEWS」投稿受付終了
12月	(12/21) 1433号 (12月号) 配布	
1月	(1月末) 1434号 (1月号) 配布 《完全リニューアル》 12頁・「トピックス」のタイトル一覧のみ掲載	



たとえばこんな表紙かも？
10月号をどうぞお楽しみに！



安田講堂がモチーフのイラストも！

学内広報イメージ図（画像・本文はダミーです）



1286号から表紙・裏表紙がカラーになりました。



1327号でリニューアルし、表紙が現在のような体裁になったほか、内容も特集・コラムなど読み物としてのメディアになりました。その後、1389号でフルカラーになりました！



2010年からは緑の学内広報でおなじみの「別冊・学内広報」も登場しはじめました！今後は、この別冊も増えていく予定です！



1430号より、デザイン・内容ともに大幅なリニューアルをいたします！乞うご期待！！



designed by deema

—お問い合わせ—
本部広報課（内線：22031）

NEWS

一般ニュース

産学連携本部

東京大学アントレプレナープラザ開業5周年記念プログラム開催

一般

開業5周年を迎えた東京大学アントレプレナープラザで7月26日(木)、入居する東大発ベンチャー企業と産学連携本部関係者が一堂に会し、進捗報告会と交流会が行われた。同プラザは大学発ベンチャー企業支援施設として、(株)成信の根本信男社長の支援により2007年6月に開業。全学的な大学発ベンチャー支援を行う当本部と、(株)東京大学エッジキャピタル、(株)東京大学TLOの三者が入居する産学連携プラザの隣接地に大学発ベンチャー支援施設が立地することで、効果的な支援が行われている。

冒頭、当本部事業化推進部の各務茂夫部長から、開業5周年に至る経緯や、本学における起業・大学発ベンチャー支援事例として、(株)東京大学エッジキャピタルの第2号ファンドによる本格的な投資展開と同社支援企業である(株)モルフォの東証マザーズ上場、東京大学アントレプレナー道場生の起業状況、文京区との連携による「社会起業家アクションラーニング・プログラム」等に関する進展状況が報告された。

また、保立和夫産学連携本部長から、「新しい学術領域の開拓と成果の社会還元は大学の使命であり、そのための重要な役割を担う大学発ベンチャーに対する支援もまた重要な課題。本学の研究者、あるいは学生であった方々が、大学のミッションのもとに社会の役に立ち、世界を変えていく力を示されているのを目の当たりにすることができ、大変喜ばしく、感謝申し上げたい」との挨拶があった。

国立大学法人化後、教育・研究だけではなく、研究成果を広く社会に普及していくことが国立大学の本務のひ

とつとして位置づけられているが、大学発ベンチャーの事業立ち上げ期における活動支援をはじめ、事業化へ向けたさまざまな支援を行ってきた当本部の支援活動が実を結び、本施設がイノベーションの核として機能している事実が広く認識された。



東大発ベンチャー企業のみなさんと当本部関係者



現在入居している企業と卒業した企業から活躍ぶりが報告された



東京大学アントレプレナープラザの歩みを報告する各務部長



一般

本部留学生・外国人研究者支援課

平成 24 年度第 1 回「外国人留学生支援基金奨学生及び長島雅則奨学金証書授与式」開催される

教職員ならびに卒業生の方々からの寄附金で運用されている「外国人留学生支援基金」は、平成 24 年度第 1 回奨学生（奨学金月額 5 万円／支給期間：平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月）として 20 名（うち 10 名は「長島雅則基金」による奨学生）の外国人留学生を採用し、7 月 26 日（木）に奨学生証書授与式が開催された。



謝辞を述べた王 美璇さん

式では、羽田正副学長（留学生支援基金運営委員会副委員長）から奨学生に証書が授与され、「本奨学金は教職員、卒業生の方々からの寄附金により支給されるものである。優秀な留学生の皆さんには、研究・勉学の成果を期待している」との激励があった。

引き続き、奨学生を代表して、教育学研究科博士課程の王 美璇さん（台湾）から、「東京大学の多くの方に支えられて勉学に打ち込める機会を得られたことに感謝します」との謝辞が述べられた。

なお、外国人留学生支援基金奨学金受給者は、前身の外国人留学生後援会から通算して今回で 380 名となった。ここに本基金の趣旨にご賛同いただいている皆様のご支援に対し、改めて御礼申し上げる次第である。



東京大学外国人留学生支援基金平成 24 年度第 1 回奨学生一同



一般

リサーチ・アドミニストレーター推進室

科研費（初級編）“計画調書”説明会を開催

8 月 1 日（水）15 時から工学系研究科列品館大会議室において、リサーチ・アドミニストレーター推進室と工学系研究科共催による「科研費（初級編）“計画調書”説明会～初めての科研費を確実に獲得するためのコツ！！～」を開催した。

リサーチ・アドミニストレーター（URA）推進室では、学内に URA の定着を図るため、URA の広報・周知活動、外部資金獲得前における科学技術政策の情報収集や外部資金の申請講習などの取組みを試行的に行っており、今回はその一環として以前から科研費の説明会を行っていた工学系研究科の協力を得て、ワークショップを含む説明会を実施した。

第 1 回目となる本説明会は、科研費の応募を予定している工学系研究科及び情報理工学研究科の若手研究者を対象に呼びかけ、15 名が受講した。

矢野正晴 URA 推進室副室長からの開会挨拶の後、工学系研究科の野田正彦学術研究調整室副室長が「外部資金の概要」として、研究費の特性や費目などによる違い及びそれを踏まえた申請内容の違いやポイント、科研費の「補助金」から「基金」への移行の際の変更点などについて説明を行った。



野田学術研究調整室副室長の説明

続いて、小山和義特任研究員（工学系研究科）が「計画調書を書くコツ」として、申請にあたっての心構え、留意点や記載欄毎のポイント・注意点などについて説明を行った。



小山特任研究員の説明

その後、URAの水谷健太郎特任研究員（新領域創成科学研究科）から「計画著書作成ワークショップ」として、実際の計画調書を参考に「修正前」と「修正後」などを示しながら、より良い書き方などについて説明を行った。



水谷特任研究員の説明

最後に質疑応答が行われ、過去に不採択となった申請内容の見直し方法、研究略歴の記載方法、設備備品など研究経費の積算の考え方などについて受講者から質問があり、若手研究者の研究費獲得に向けた意気込みがよく伝わってくる説明会となった。

また、第2回は8月30日（木）に柏キャンパスで新領域創成科学研究科の若手研究者を中心に行われた。

国際本部 日本語教育センター

一般

日本語教育センター 2012 年度夏学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式が行われる

日本語教育センターの2012年度夏学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式（修了証書授与式）が、8月3日（金）15時30分から赤門総合研究棟200講義室で行われた。

センターでは種々の日本語コースを開講しているが、このうち「集中日本語コース」は、初級から中上級までの留学生が1学期間集中的に日本語を学ぶコース、「学術日本語コース」は日本語で論文を書くための日本語スキルを身につけるコースで、この両コースについては修了式を実施している。「集中日本語コース」は5クラス、「学術日本語コース」は2クラスを4月に開講し、両コースあわせて47名の受講者が所定の課程を修了した。



集合写真

式には、修了生とセンター関係教職員のほか、来賓として、修了生の指導教員である小口高教授（新領域）、柴田道夫教授（農）、西村亮平教授（農）も出席された。センターの菊地康人教授から、修了生一人ひとりに修了証書が手渡された後、全員に対して、期を通じて高い出席率を維持し、日本語力をここまで伸ばしたことをねぎらう講評が述べられた。

続いて、修了生を代表して、サロズ ポウデルさん（ネパール、工、クラス1A）、グエン ジェウ リンさん（ベトナム、工、クラス3）、オウ ミセンさん（台湾、教育、学術日本語コース）の3人から、受講によって得たものなどを紹介する日本語によるスピーチがあり、約3ヶ月

間の日本語のすばらしい上達ぶりが披露された。

式終了後、引き続き山上会館で懇談会が行われた。来賓の小口教授と西村教授から留学生に向けて、日本語の学習が留学生生活を益することなどに触れた励ましのスピーチがあり、さらに、3人の修了生バシヤ ユセフさん（スペイン、情報理工、クラス1B）、リン シンイーさん（台湾、農、クラス2）、エン イさん（中国、経済、クラス4）からのスピーチ、クラス全員での日本の歌の披露、教員を囲んでの写真撮影など、なごやかで楽しいパーティーとなり、終了時間が来ても別れを惜しんで立ち去りがたいほどの雰囲気であった。

なお、今期の修了者47名の所属・出身は、以下のとおり、11研究科等、23の国または地域である。

■研究科等（11研究科）

教育学研究科	1名
法学政治学研究科	3名
経済学研究科	4名
総合文化研究科	4名
理学系研究科	1名
工学系研究科	19名
農学系研究科	6名
医学系研究科	2名
新領域創成科学研究科	4名
情報理工学系研究科	2名
学際情報学府	1名

■国または地域（23カ国・地域）

・アルジェリア	1名	・台湾	2名
・イタリア	2名	・中国	12名
・インド	1名	・ドミニカ	1名
・インドネシア	3名	・ネパール	1名
・エジプト	1名	・ブラジル	1名
・オーストリア	1名	・フランス	1名
・韓国	5名	・ベトナム	2名
・ギリシャ	1名	・ポーランド	1名
・ジンバブエ	1名	・マカオ	1名
・スーダン	1名	・マケドニア	1名
・スペイン	1名	・マレーシア	1名
・タイ	5名		



サロズ ボウデルさんによるクラス1A代表スピーチ



懇談会でのクラス2の合唱

一般

本部社会連携推進課

高校生のための東京大学オープンキャンパス2012開催

8月7日（火）本郷地区キャンパスにおいて、「高校生のための東京大学オープンキャンパス2012」が開催され、約7,200名の参加者で賑わった。

当日は晴天にも恵まれ、参加者は、各学部等の模擬講義や研究室見学等を通じて、本学の教育・研究活動を体験した。また、現役学生による東大ガイダンス、キャンパスツアー、女子学生コース等の企画や、総合図書館、総合研究博物館等の見学も盛況であった。

オープンキャンパスは、高校生・受験生に大学を公開し、本学への理解を深めてもらうためのイベントで、2000年度より毎年開催されている。例年であれば、本郷・駒場両地区で2日間にわたり実施していたが、今年は昨年冬の開催に引き続き、本郷地区キャンパスにおいて1日で実施した。



キャンパスツアーでは、構内の名所紹介のほか、現役の学生による学生生活の話も満載で、好評であった



女子学生コースでは、現役女子学生が授業・サークル・就職など様々な質問に答えた



名所・三四郎池周辺を散策する参加者たち



矢野 URA 推進室副室長の開会挨拶



山下先端科学技術研究センター特任教授の説明



リサーチ・アドミニストレーター推進室 リサーチ・アドミニストレーター研究会を開催

8月8日(水)16時30分から弥生講堂会議室において、リサーチ・アドミニストレーター (URA) 推進室主催による第1回目の「リサーチ・アドミニストレーター研究会」が農学生命科学研究科で開催された。農学生命科学研究科の教職員、URA 室室員など計 31 名が参加した。

本研究会は、URA の周知・広報活動の一環として、実際の URA 業務を事例紹介し、ディスカッションを交えながら活動内容を周知するとともに、研究現場のニーズを集約することを目的として行っている。

矢野正晴 URA 推進室副室長からの開会挨拶の後、URA の山下秀先端科学技術研究センター特任教授が「大型プロジェクトの導入とマネジメント～ある NEDO プロジェクトの場合～」として、プロジェクトの導入段階から運営、終了後の対応まで URA としてどのようなサポートをしたか説明を行った。

続いて、「担当者からの苦労話」として NEDO プロジェクトを例に、五井博有機系太陽電池技術研究組合 (RATO) 事務局長が、研究者と事務部門との間に立ち会計処理や検査対応、NEDO との交渉などに取り組んだこと、また、竹内典子先端科学技術研究センター経営戦略室学術支援専門職員が秘密情報や知的財産の取扱、研究成果の公表などについて NDA (秘密保持契約) を結んで管理・運営に取り組んだことについて説明を行った。

その後、フリーディスカッションが行われ、支援するプロジェクトと URA の専門分野の関係や諸外国の URA の状況などについての質問や、「外部資金プロジェクトの規模や内容の違いにより支援の在り方が違うので整理が必要」、「外部資金を獲得する前段階から URA が関与するために支援組織としての整備やトレーニングが必要」など貴重な意見が挙がり、充実した研究会となった。



フリーディスカッションの様子

総括プロジェクト機構



一般

航空イノベーションフォーラム 「YS-11 初飛行 50 年～日本の航空 技術・産業の今と未来～」開催報告

8月22日(水)、伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにおいて、航空イノベーション総括寄附講座(以下CAIR)、航空イノベーション研究会主催、日本航空宇宙工業会後援により、航空イノベーションフォーラム「YS-11 初飛行 50 年～日本の航空技術・産業の今と未来～」が開催された。50年前の8月に戦後初の国産旅客機であるYS-11が初飛行し、現在、YS-11以来の国産旅客機「三菱リージョナルジェット」MRJが初飛行をめざし開発が急ピッチで進められている。高度な技術を集積し、国際的なサービスを展開する航空機産業は、わが国製造業の牽引役としての期待が高い。航空機産業は航空輸送量の世界的な増大に支えられる成長産業であり、YS-11からMRJへと受け継がれる我が国の航空技術・産業の今後の50年を展望することを目的に、本フォーラムは開催された。当日は、300名を超える参加があった。

冒頭、保立和夫産学連携本部長(工学系研究科教授)より、開会挨拶がなされ、YS-11の最初の構想は本学の駒場Ⅱキャンパス内に設置された(財)航空機設計研究協会によって開始されたことなどの紹介があり、現在、航空分野の更なる飛躍に向け、産学官の連携による「東京大学航空イノベーション研究会」を設立、更に、その後、三菱重工業(株)の賛同を得て総長室総括委員会の下に「航空イノベーション総括寄附講座」が設置され、本フォーラムが企画されたことなどが説明された。

CAIRの岡野まさ子特任准教授の司会により、フォーラムは進行し、最初にCAIR代表である鈴木真二教授(工学系研究科)より、東大における航空分野での教育研究の歴史の変遷が、本フォーラムとの連携で公開された本学ホームページToday Research記事「日本の知、空を翔(かけ)る～東京大大学が拓く航空工学」に基づき紹介され、YS-11以後50年間の、航空技術・産業動向と

今後の展望、および国内各地で湧き起っている航空宇宙産業参入の動きが紹介された。続いて、三菱航空機株式会社 川井昭陽副社長より、日本初のジェット旅客機MRJの特長と開発状況が、そして、東レ株式会社 須賀康雄常任理事より、航空機の主要構造部材に使用されるに至った新素材、炭素繊維複合材料の開発の経緯と今後の展望が発表された。

午後は、YS-11を開発した日本航空機製造株式会社で営業を担当した、株式会社島津製作所 矢嶋美敏相談役(元社長)から、航空機ビジネスの経験と教訓に基づき、今後の航空機ビジネスへの助言が披露された。航空機製造は、機体はもちろん、各種装備品も付加価値が高い成長産業であり、住友精密工業株式会社 田岡良夫専務取締役から、航空機の脚システムを中心とした同社の世界市場への参入の経緯が紹介され、M&Aを繰り返し巨大化する世界の航空機産業と競争する上での課題が指摘された。こうした発表を踏まえ、経済産業省製造産業局航空機武器宇宙産業課の伊藤慎介課長補佐からは、他産業における日本の国際的な地位急落の要因分析から、日本の航空機産業に対する4つの課題が投げかけられた。それは、1)ダイナミックな世界の産業構造変化にどのように対応するのか、2)航空製造、運航の世界的なシステム化にどう向き合うのか、3)炭素繊維の大幅導入に対して日本の優位性を如何に維持するか、4)LCC(Low Cost Carrier)の台頭による航空機の多量製造に対応できる低コスト化にどう向き合うか、である。国土交通省航空局安全部航空機安全課 小西隆太郎課長補佐からは、航空機の整備事業に関する制度の概要が説明された。航空機は製造国政府が製造機の安全を審査し、さらに運航する国が安全を管理する国際的な取り決めがあり、国家間の相互認証を今後推進することの重要性が確認された。

最後は、日本航空宇宙工業会 柳田晃技術部長のコーディネートにより、宇宙航空研究開発機構から岩堀豊複合材料研究センター長、張替正敏DREAMSプロジェクトマネージャー、西澤敏雄ジェットエンジン技術研究センター長、本学より李家賢一、鈴木真二両教授(工学系研究科)がパネラーとなり、「航空技術の50年後に向けたロードマップ」をテーマに会場を交えて議論された。日本の高度な技術を活かすためにも、航空機産業の拡大が求められ、そのためには、工学の教育・研究のみならず、経営戦略、国際政策交渉に向けた人材育成が重要であることが指摘された。また、鈴木教授から、学問分野、産学官、国家の壁を越えた教育体系の構築が東大で始まり、航空イノベーション研究会により「現代航空論～技術から産業・政策まで」と題する教科書がまとめられ発刊予定であることが紹介された。最後に、鈴木教授から、今後も総合大学としての東京大学の強みを生かした研究・教育活動及び情報発信を通じて航空の発展に貢献していきたいとの挨拶があり、閉会となった。



保立産学連携本部長による開会挨拶



JAXA・東大の研究者によるパネルディスカッション

部局 ニュース

部局

大学院工学系研究科・工学部

第3回ご父母のためのオープンキャンパスを開催

7月14日(土)13時より、第3回ご父母のためのオープンキャンパスを実施した。

今回も前回同様、工学系研究科・工学部の紹介および研究室見学が行われた。紹介では、工学系研究科・工学部の国際的な位置づけと、「博士」の人材育成の内容が主に説明された。研究室見学では工学系研究科・工学部ほぼ全ての専攻・学科の見学が実施された。保護者の皆様は、原田昇研究科長、光石衛学術調整室長の話を大変熱心に聴講され、質疑応答も盛んであった。さらに見学先では、研究に対する技術的な質問などもあり、研究の紹介をした説明員との会話を楽しんでいる様子だった。とても暑い日であったが、1,117人と多数の保護者に参加頂けたことから、保護者の東京大学の教育・研究に対する関心の高さを窺うことができた。

アンケートは68%の保護者から回答を頂いた。参加して頂いた保護者の多くの皆様に博士に関心をお持ち頂き、この催しに対する満足度も高いという集計結果が得られた。また、原田研究科長の工学系研究科・工学部紹介の説明が大変興味深かったなどの意見も頂くなど、おおむね好評であった。

本イベントは、工学系研究科・工学部に所属する学生の保護者の皆様に案内を出し、ホームページにて申込受付を行った。申し込み開始時から非常に多くの参加希望者が殺到し、800名の枠がすぐ埋まってしまった。そこで急遽、研究室見学無しで講演のみ参加の回を設けたところ、そこにも600名を超える申し込みがあった。

本イベントでは約50名の学生の協力を得て、引率や受付を円滑に行うことができました。関係者の多大なるご協力に感謝致します。



工学系研究科・工学部紹介を行う原田研究科長



工学系研究科・工学部の教育への取組み、特に博士課程人材育成を説明する光石学術調整室長



講演に聴き入る保護者

大学院農学生命科学研究科・農学部
 附属牧場にて親子ふれあい教室開催される

8月2日(木)農学生命科学研究科附属牧場にて、笠間市在住の小学生とその保護者を対象とした親子ふれあい教室が、笠間市との共催で開催された。今回の親子ふれあい教室は、初めての試みだったが、午前・午後の2回に、合わせて18組44人の親子が参加し地元住民の関心の高さを物語る催しとなった。

当日は真夏の炎天下のもと、牧場案内、体験乗馬の後、バターづくり体験、牛乳試飲が行われた。

特に、牧場案内では生まれたばかりの仔ヤギに、体験乗馬では初めての馬上からの風景に、それぞれ子どもたちから歓声があがった。また、牧場で搾った牛乳を使用したバターづくりでは、なかなか固まらないバターに悪戦苦闘しながらも、親子で笑顔で取り組む姿が見られた。

附属牧場では、来年も同様親子ふれあい教室を行う予定である。また、11月10日(土)には一般公開デーを予定している。



体験乗馬風景



バターづくりに挑戦

大学院工学系研究科・工学部
 テキサス大学 MD アンダーソンがんセンターでの1st Joint Symposium「Bridging Cancer Nanotechnology」開催の報告

8月13日(月)と14日(火)の2日間にわたってテキサス大学MDアンダーソンがんセンター(UTMDACC: 米国テキサス州ヒューストン)において、標記のシンポジウムが開かれた。本シンポジウムは東京大学学術振興会先端研究拠点事業「ナノバイオ国際共同研究教育拠点」とUTMDACCが主催したもので、グローバルCOEプログラム「医療システムイノベーション(CMSI)」及び最先端研究開発支援「ナノバイオテクノロジーが先導する診断・治療イノベーション(ナノバイオ・ファースト)」が共催した。工学系の他に医学系、薬学系の教員と大学院生27名が参加し、UTMDACCからはOliver Bogler 上級副学長(学術担当)をはじめ、多くの参加者を得て合計参加者は100人を超え、活発な議論が繰り広げられた。



ヒューストン市内のテキサスメディカルセンターの建物の多くがUTMDACCに所属している

UTMDACCは、がんの治療と診断において顕著な業績を上げており、US Newsが行っている調査で、アメリカにおけるがんの専門病院として過去10年以上第一位にランクされている。UTMDACCのスタッフには「Making Cancer History」を合い言葉に、がんの予防、診断、治療を改善する強い使命が共有されている。大学院も併設されており、CMSIでは過去4年間にわたって国際交流プログラムのパートナーとして、サマーイン

ターンシップに参加する大学院生の派遣と受け入れを行ってきた。東大の大学院生のときに2ヶ月のサマーインターンを経験した後、学位取得後に UTMDACC の同じ研究室に博士研究員となって留学している研究者も何人かいる。

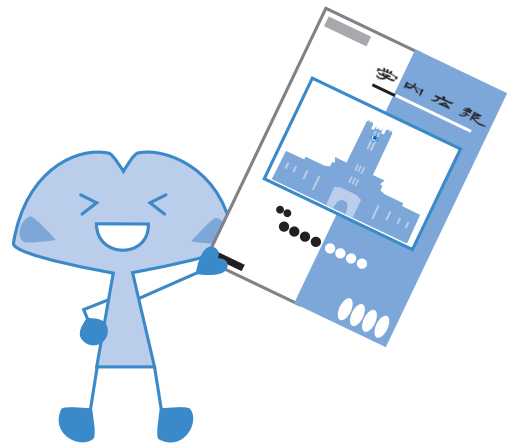


講演中の宮園浩平医学系研究科長

ナノテクノロジー、バイオテクノロジー及び関連領域における最先端を追究している本学と UTMDACC との連携による相乗効果は高く、CMSI の後継プログラムによる交流は双方にとって重要なものとなろう。



シンポジウム二日目の様子。今後共同研究を
発展させる可能性を探る質疑が活発に行われた



プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム 《実践編》 #07

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きる。ともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟でいます。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

被災した東北の沿岸部は津波により甚大な被害を受け、基幹産業である漁業は大きな打撃を受けました。さらに放射能汚染により水産物の安全性に対する不安も大きくなっており、被災地の漁業は二重の苦難を受けています。しかし、黒倉寿教授（農学生命科学研究科）は、被災地の漁業が抱える問題の多くは日本の漁業全体に共通する問題だと指摘します。「電子商取引」をキーに復興支援に着手した黒倉教授にお話を伺いました。

プロジェクト名： 三陸水産業・漁村・漁港復興に向けた産学官連携支援プロジェクト

広報課 被災地の漁業が抱える問題は何でしょうか？

黒倉 よく言われる問題として5つほど挙げられますが、「水産物流通の複雑性・非効率性」「魚離れ」「人口減少・高齢化」といった問題は、被災地に限らず全国的な問題ととらえています。また「水産物の安全性に対する不安」という問題も、確かに放射性物質に関しては被災地の水産物の問題ですが、“食の安心”という問題は放射性物質に限らないわけで、これは全国的な継続的な課題なのです。一方で、「失われたニッチ」という被災地に限定した問題があります。震災後、国内全体の漁業の供給量は変化していません。つまり、東北だけが減って、被災地以外での取引がその分増えて、従来のシステムの中で新しいバランスができていく状況です。一度奪われた市場を取り戻すのは難しい。ならば、「電子商取引」を導入して新しい別の市場を作ってしまう、という発想です。その時に、他の問題も一緒に解決して、日本の漁業全体が活性化するようなモデルを大槌町で作ろうと思っています。

広報課 大槌町を手始めにやろうとしていることを教えてください。

黒倉 大槌町は高齢化と過疎化が進み、一次産業人口も著しく減少している典型的な地域です。そして震災による津波で漁業は壊滅的な被害を受けました。そのあおりで旧大槌漁協が今年1月に経営破たんしたほどです。しかし、大槌町は漁業の町として復興したいと考えており、新たに漁協も作り再建を目指しています。そんな大槌町の漁業復興に「電子商取引」を導入することは大きなメリットがあります（図1）。

まず、電子商取引によって新たなニッチを作ります。そして、電子商取引システムの構築によって、新しい水産物流通システムが出来上がります。これにより、「複雑な流通経路のために青果物と比べて生産者受取価格の割合が低い」という水産物特有の問題も解決できます。全体

として利益の最大化を図るわけだから、誰も文句は言わないでしょう。また、「魚離れ」とよく言われますが、日本人は相変わらず魚が好きですよ。この分析はきちんとしければいけません。魚だけでなく、牛肉の消費量も減っていることを考えれば、「魚離れ」ではなく、不景気による所得の低下が消費量低下の原因だと思っています。電子商取引によって価格が低下すれば水産物の消費は増えるでしょう。さらに、スーパーで魚を買う人と専門店で購入者へのアンケート調査から見えてくるのは、消費者はスーパーと専門店を使い分けているということ。双方の利点をまとめると、鮮度がよい、小分けで買いやすい、ある程度調理してありゴミが出ない、産地や味・品質の情報がある、自分のペースで買って利便性が高い、といったことが水産物に求められていることがわかります。さらに、「水産物の安全性に対する不安」を拭うことも不可欠です。電子商取引であれば、これらすべてを満たすことが可能です。

広報課 高齢者の多い漁業でこの新しい取組みは根付くのでしょうか？

黒倉 先日、大槌町の漁業関係者と話をしてきました（図2）。漁業の再建で町全体を活性化しようという意気込みを感じました。先日採択されたJST以外にも、このプロジェクトは産学連携で進めなければいけないので、経済産業省のプログラムにも申請をしています。大槌町と東大は復興に向けた連携協力の協定を結んで全学的に支援をしていく体制ができていますが、このプロジェクトについても、全学機構の海洋アライアンスを基盤に分野を横断して取組んでいきます。

北海道南西沖地震（1993年）から20年たった被災地の現状が知りたくて、この夏は奥尻へ行き調査をしてきました。話を聞くと、震災から5年～10年は確かに復興特需とも言えるものがあり、多大な費用が投入されたことにより世

帯数も増えたそうです。東日本の復興もこの5年が勝負でしょう。その間に地域にしっかり根付くものを作り上げなければいけません。

私が考えるのは、高齢者にとって楽しい漁業です。楽しければ継続できます。「電子商取引」は一見、高齢者の漁業関係者には縁遠く感じるかもしれませんが、小規模でできて、体に負担がかからないので、高齢者向きなのです。さらに顧客と直接のつながりができて、漁業がやりがいのある楽しい仕事に変わります。こうしたシステムは、過疎化の中で地域間の交流を深めることにも活用できると思います。「漁業が変われば、空気が変わる！」ここから日本の漁業を変えたいと思っています。

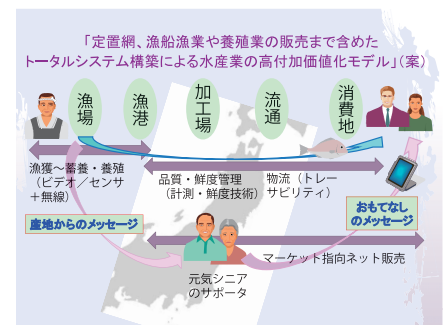


図1：水産物にストーリー性を付加した高付加価値化モデルを提案



図2：漁業関係者との打ち合わせの様子

一プロジェクトに関する問い合わせ—
農学生命科学研究科 教授 黒倉 寿
akrkrh@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
構成：本部広報課（内線：82032）

ひょうたん島通信

大槌発！

第9回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱（ほうらい）島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から、大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

柏崎さんの屋台のこと

中井 祐（工学系研究科社会基盤学専攻教授）

復興計画の支援で大槌に通いはじめて1年半、その間大槌の人たちとのさまざまな忘れがたい出会いがあります。なかでも、柏崎浩美さん、美香子さんご夫妻は、それをきっかけに大槌への思い入れが深まったという意味で、わたしにとって特別です。

店を津波で失った柏崎さんは、昨年7月、あたり一面がれきだらけの小鎚神社の門前に、バラックの木造屋台で「居酒屋ドン」を開店しました。わたしは、助教の尾崎信君を中心とする研究室の仲間、そして日頃懇意にしているデザイナー南雲勝志さんとともに、屋台のデザインと製作の面から支援しました。はじめて柏崎さん夫妻と出会ってから屋台開店までのおおよそ1ヶ月半の経緯は省きますが、わたしたちが大切にしたのは、補助金や寄付に頼らず（つまり資金ゼロ）、人のつながりだけで、結（ゆい）の精神で実現する、ということです。周囲の人がすこしずつ協力や手間を無償で提供するかわりに、柏崎さんは、町の人たちが集まり語らい、わずかでも慰められる場所と時間を提供するのです。

しかしこれこそ「言うは易し」の典型で、敷地を借りる交渉、材料の調達、製作場所や大工さんの確保、地面に敷く砂利の調達と整地、屋台の設計など、クリアすべき課題は山積でした。しかも、まだ被災の痕跡なまなま

しい極限的な状況下ですから、いま思えばわずか1ヶ月でよくぞ開店にこぎつけたものです。柏崎さんの人徳と大槌の共同体風土の賜物でしょう。壁にぶつかったときになぜか手をさしのべる人がでてくる（そのさしのべかたが一見ぶつきらぼうなのが、とても大槌らしいのです）。ほかの町で同じことを試みても、そううまくはいかないはずです。ですから、がれきだらけの暗闇の廃墟にぼつんと浮かび上がった居酒屋ドンの赤提灯は、大槌の人と風土の底力的一端を示していました。わたし自身、大槌の復興はかならず成る、と確信した瞬間でした。

津波は、人間が生き抜くうえできわめてシビアな局面をもたらしました。こういう局面では、美しさや汚さ、強さや弱さといった人間のなまの性質が、すくなくならずさらけ出さ

れる。しかし、そのなまの人間の芯の部分というのは、本来的に、情とかやささだとかそういうものでできているのではないか。がれきの廃墟を照らした赤提灯、その下で自分たちはなにごともなかったかのように笑顔で酒と料理をふるまう柏崎さんご夫妻の姿を眺めながら、そんな気持ちになったことを思い出します。

11月、柏崎さんは屋台を大槌北小学校の仮設商店街に移して「屋台居酒屋みかドン」として再出発、屋台は3ヶ月で役割を終えました。何年後か、町が復興を果たして自分たちの日常を無事とりもどしたあと、あの再起の原点となった赤提灯の風景を思いながら、柏崎さんご夫妻と酒を酌み交わす、その日が待ち遠しくなりません。



【左】居酒屋ドン開店の日の柏崎浩美さんと美香子さん【右】大槌美女3人を囲んで（中央が美香子さん）。後列は左から、すでにできあがっている、助教の尾崎信君、南雲勝志さん、筆者。

国際沿岸海洋研究センター専門職員・川辺幸一です。大槌町にある沿岸センターで震災に遭いました。今は、釜石市から提供を受けた仮設住宅に住み、そこから大槌町中央公民館内にある復興準備室に通っています。



◆被災地の声を電波にのせて — Raised on Radio —

車で大槌町に来られる機会があるときには、カーラジオの周波数をFM77.6MHzにあわせてみてください。

2012年3月31日、臨時災害FM放送局として「おおつさいがいエフエム」が開局しました。このFM局は、町から委託を受けた地元のNPO法人「まちづくり・ぐるっとおおつち」さんが運営しており、町民の方々がスタッフとして活動されています。

スタジオは「ひょうたん島通信」第2回でも紹介した「シーサイドタウン マスト」の一角にあり、番組内容は「町民の声を伝える」をコンセプトとして復興計画や生活支援の情報、申請手続きといった各種行政情報などのほか、音楽

やインタビューなどで構成されています。7月30日には沿岸センター長の大竹二雄教授も出演し、当センターの活動状況を紹介させていただきました。

このコラム同様、被災地の声や様子を発信しつづけることが被災地支援の一貫となることに間違いはありません。その役割を担うこのFM局の存在は、今後ますます重要になってくると思います。

町外避難者等への情報提供のために、Ustreamやサイマルラジオでの配信も開始されています。皆様もこのラジオを通じ、町の様子や町民の声を直接お聞きになってみてはいかがでしょうか。



制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

Designed by doema



1500キロカロリー

真船 文隆

総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

ダイエットとリバウンドを繰り返し、そろそろ何回目かのダイエットの季節が始まろうとしている。リバウンドしているので全く説得力はないが、ダイエットをするためには、食べ物の熱量(カロリー)を頭に入れておくのがよいと思う。大学生協食堂では、メニューにカロリーも表示してあるのでわかりやすい。一番低カロリーな主食はおそらくうどんで220 kcal(キロカロリー)、逆にかなり高カロリーなのはカレーライスで800 kcalである。成人男性の基礎代謝に必要なエネルギーが1日あたり1500 kcalなので、うまくバランスを考える必要がある。食べ過ぎたと思ったら、運動なら2時間のマラソンで20キロから25キロ走ると、1500 kcal分のエネルギーが消費されるようだ。

この夏、大学では節電が大きな課題であった。ピーク時電力を前年度比20%減、使用電力量を15%減という数値目標を掲げており、原稿を書いている8月下旬の段階でも、かなりの達成度のあるようである。電力量に関して言えば、10畳の部屋の一般的な明るさの照明(120 Wとする)を15時間使用する際に消費する電力量は1800 Wh(ワット時)で、1 Whは0.86 kcalであるので、成人男性の基礎代謝とほぼ同じ1500 kcal程度の値になる。一方、1500 kcalつながりであれば、エタノール 5 mol(約0.3リットル)が完全燃焼する際に発生する熱量は6834 kJ(キロジュール)である。1 kJは約0.24 kcalなので、熱量は1640 kcalとなる。このエネルギーは一般家庭のお風呂であれば、水の温度を6度くらい上昇させる熱量に相当する。また、力士(175 kgとする)ひとりを駿河湾の海面から富士山頂に持ち上げて得られるポテンシャルエネルギーは 6.6×10^5 kgf·m(重量キログラムメートル)であり、1 kgf·mは 2.3×10^{-3} kcalであることを用いると、このエネルギーも約1500 kcalとなる。ポイントは、生命現象であれ、物理現象であれ、エネルギーという共通の数値で議論することができるということである。ただし、ワット時やジュールやカロリーなど、いくつかの単位が存在するという事実から分かるように、対象とする事象によって用いられる単位は異なる。単位が異なると、全く別ものように思えるが、同じエネルギーであり、それぞれの数値は比べることができる。上記の例を感覚でなく、数値で比べて、意外に思うこと、あるいは何か新たに見えてくるものはあるだろうか？

さて節電対策として、昼間は大学の部屋の照明を消してみた。0.12 kWの節電である。一方、「東京大学の電力使用状況」サイトによると、駒場キャンパス全体での現在の電力は2850 kWである。0.004%のささやかな電力削減に関しては、数値で議論せずに自己満足に浸っているのがよかったのかもしれない。

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

『アジアの食と農・環境 (農学国際特論III)』

世界の陸地の2割に世界の人口の6割が住むアジアは、世界経済での存在感を高め、世界の成長センターと言われていきます。しかし、一人あたりのGDPは地域全体としては依然として低く、国による格差も大きいまです。また、熱帯林の消失や都市化・工業化に伴う大気汚染など様々な環境問題が深刻化しています。一方、自然環境や土着の文化などあらゆる面に見られる高い多様性をうまく活用すれば、地域の特性に合った環境保全型農業を通して食を確保しつつ、希望に満ちた社会の将来像を描くことができるかも知れません。

本科目では、アジアの食料、農業・環境の現状と解決策について、俯瞰的な視野を持つとともに、ローカルな現場のリアリティに立脚して検討できるような複眼的な視点を養うことを目指しています。講義を行うのは、アジアなど諸外国から本学が招聘する特任教員など外国の専門家の方々です。インドネシア、フィリピン、タイ、ラオス、ネパール、インド、スリランカ、バングラデシュなどから招聘する特任教員等が、個別のテーマに関して一日ずつ集中講義を英語で行います。

今年度はすでに2回の集中講義を実施しました。1回目のテーマは「環境影響評価およびメコン川流域の影響評価:ラオスを事例として」、2回目は「メコン川流域における観光開発の影響:ラオスを事例として」です。今年度はあと3回、「ボルネオ先住民による焼畑農業の変容(10月6日)」、「ボルネオ先住民社会へのグローバル化の影響(12月1日)」、「地球温暖化と森林政策(1月26日)」というテーマで集中講義を予定しています。

毎回、講義の後半には質疑応答および議論の時間を取っており、活発な議論に展開することもあります。農学生命科学研究科のみならず、他研究科の大学院生(留学生も含む)も受講していますので、気軽に参加してみてください。



講義時の集合写真(2012年7月21日)

文・写真:井上真

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL:

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>



Crossroad ~産学連携本部だより~ Vol. 82

Crossroadとは、産業界と大学がクロスする場所の意味をこめます



はじめに

知的財産とは、発明、考案、意匠、著作物などの人間の創造的活動により生み出されるもの、商標などの商品又はサービスを表示するもの、営業秘密、有用な技術上又は営業上の情報などをいいます。知的財産を創造し、保護し、活用することで、創造、保護、活用という知的創造サイクルが回り、これにより産業の発達を実現されます。大学でいえば、研究活動により創出された成果を知的財産として保護し、民間企業などへライセンスすることで社会へ還元し、活用されていくことになります。

大学研究者が企業と共同研究をする場合、研究者として研究費をもらって研究する立場と、成果出願の発明者としての立場があります。場合によっては特許収入を得る可能性があります。このふたつの立場が**利益相反**の状態になりかねません。研究成果としての価値と、その研究成果を特許として出願する価値はかなり異なります。大学として、**特許出願**する意義を、いま一度、皆さんと一緒に考えたいと思っています。

知財関係規制



著作権法と商標

著作権法の目的は、著作物を創る著作者に独占的な権利を認めて創作を奨励するとともに、その独占権の範囲を著作物の利用や新たな創作を妨げないように制限してバランスを取り、社会全体として文化を発展させることにあります。

また、**商標**とは、事業者が自己の商品やサービスを他人のものとの区別するために使用するマークで、業務上の信用を維持しながら、産業の発達と消費者の利益を保護することを目的としています。

商標登録出願をすると、審査官により、「先願登録商標と類似する」等の拒絶理由通知が出されることがあります。しかし、意見書などにより拒絶理由が解消されて、商標登録されることもあります。

教えて！産連本部

7月30日に行われた知的財産研修の講義内容をご紹介します。知的財産部と産学連携課のスタッフを講師に、本学の教職員が知的財産権について理解を深めました。個別相談会においては、個別案件への踏み込んだ質疑応答が交わされるなど、大変有意義な研修となりました。

特許制度は、産業の発達のため、発明の保護と利用の促進を図る制度です。発明というと難しいと思われるかもしれませんが、「技術的な課題を解決するための新しい手段、方法」と考えて下さい。そう考えると、身近な技術論文も発明を含んでいる場合が多いことが分かります。ただし、特許として保護されるためには、産業上利用できる程度に具体化されている必要があります。その意味で、**産学連携**は、大学の新たな知見に産業界の視点を加えることができるので、大学が有用な発明を生み出すために、大きな役割を担っていると言えるでしょう。

発明の内容は、出願から1年半を経過すると全て公開されます。公開された発明の内容は、技術文献として自由に利用できます。これによりさらにその発明を凌駕する**発明の創出**を促し、技術の累積的な進歩を図る制度であると言えます。

企業と大学とが共同研究する場合、企業との**共同発明**が生まれることが多くあります。

日本の特許法では、共有権利者は、他の権利者の同意を得ずに発明の実施をすることができませんので、事前に共同研究契約で取り決めておかないと、企業が実施しても大学は収入を得られない結果となります。大学は教育と研究を使命とし、企業のように発明を実施して、収益を上げることができないので、企業に対してその点の配慮を求めています。

特許



これまでどれくらいの特許が取得されていますか？（事務職員Tさん）

A

本学では、特許性（新規性・進歩性、取得可能な権利範囲等）、活用可能性（産業上の利用可能性、社会への貢献度、収益性等）、権利化費用などを総合的に検討して特許出願を行っています。また、特許出願後もこれらのことを検討しながら権利化の要否判断を行い、特許権の取得に至っています。

「Crossroad (Vol.79)」でもご紹介しましたが、特許権を取得するためには、特許庁での審査等の過程を経る必要があります。この過程で特許権を取得できないものがあり、特許権を取得できるものでも、特許出願から権利取得まで数年を要するため、2012年3月末時点での本学法人化以後の特許権保有件数は以下のようになっています。

国内特許権：337件（2011年度：181件取得）
外国特許権：328件（2011年度：157件取得）



特許法は他国でも同じ制度なのかどうか教えてください。（知的財産研修参加者）

A

特許制度は、自国の産業を保護育成するために設けられているので、国ごとに特許制度は異なります。例えば、米国では長い間、日本などのように先に出願した人に特許を与える先願主義ではなく、先に発明した人に特許を与える先発明主義を採用してきました。ただし、2013年3月には先願主義に移行する予定です。他にも、日本では共有権利を第三者にライセンスする場合、他の権利者の同意が必要ですが、米国は不要です。特許制度は国ごとに相違するため、契約上の課題も異なっているのが実情です。

連絡先：産学連携本部（本部産学連携課）
電話：内線22857（外線03-5841-2857）
WEBサイト：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索



このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

東アジア首脳会合における会議報告 エネルギー供給側の 効率化に焦点

政策ビジョン研究センターは、東アジア ASEAN 経済研究センター (ERIA、本部ジャカルタ) より、エネルギー効率化ロードマップ・プロジェクトの依頼を受け、2010年11月より調査・研究活動を進めている。本プロジェクトの目的は東アジア諸国、特にラオスの発展に資するべく、エネルギー技術の経済的及び社会的影響を考慮したエネルギー高度化のロードマップを提案することだ。ラオスを含む発展途上国においては、需要側よりも供給側の効率化のほうが比較的制御が容易であると判断し、エネルギー供給側の効率化に焦点を当てることにした。

東アジア首脳会合の枠組みの下で、7月30日から8月1日の間、第2回エネルギー効率化会議が実施された。東アジアのエネルギー効率化の問題について、政策への理解を深め、各国の知識や経験を共有し、将来の可能性を議論する機会を提供するために、政策担当者、学者、エネルギーや経済開発の専門家、民間企業が領域を超えて集まった。ERIA、アジア開発銀行、

国際エネルギー機関等の国際機関も参加し、アジア十数カ国から200名以上が出席した。本センターからは、芳川特任教授、坂田一郎教授、佐々木一特任研究員、山口健介公共政策大学院特任研究員などが出席し、活動成果の最終報告を行うとともに、東アジア諸国におけるエネルギー動向に関する議論を行い、つながりを深めた。

同会議は、EAS におけるエネルギー効率化の全体像、国際機関や民間部門の役割、東アジアにおける再生可能エネルギー、および本学が担当したセッションの4セッションで構成された。

本学が担当した、第3セッションの Energy Efficiency and the future Energy Mix in ASEAN では、坂田教授によるラオスにおけるエネルギーロードマッププロジェクトの報告と政策提言を受け、ラオス国エネルギー鉱物省より、エネルギー政策と電力開発、エネルギー効率化につ



本学メンバーは第2回エネルギー効率化会議への招待を受け、研究報告を行った。

いての議論と提案がなされた。タイ電力局 EGAT からは、タイから見たラオスの発電について、ミャンマー電力省からは、ミャンマーの農村電化について現状と課題が提示された。以上の視点を踏まえて包括的に議論し、今後の方向性についても示唆がなされた。

最後に ERIA の西村事務総長より、本会議の成果は今年9月に実施される東アジアエネルギー大臣会合および、ASEAN サミットで報告されることが伝えられた。東アジア諸国全体を見据え長期的な協調に基づくエネルギー効率化を実現していくため、今後とも継続的に協力をしていきたいと考えている。

産業から見たエネルギー政策

芳川 恒志 特任教授

7月12日、第3回エネルギー政策ラウンドテーブルが開催された。カリフォルニア大学サンディエゴ校 Ulrike Schaeede 教授が「米国から見た日本のエネルギー政策」について基調講演を行い、その後パネルディスカッションを行った。ポイントは以下のとおり。

日本の産業界はもともと諸外国に比べて割高な電気料金を負担してきた。福島原子力発電所事故以降電力価格が上昇し安定供給にも不安があり、このままだと国外に出ていくという判断を行う企業も出てくる。将来に向けた日本の経済構造や産業構造のあり方等を見据えた上で、それを支える将来のエネルギー需給の姿を明らかにしなければならない。

短期的には、エネルギー需給は「綱渡り」的状况にある。財政赤字が拡大する中で燃料輸入が増加し経常収支の黒字も減少した。こ

のような事態が続けば、日本経済や円への信認が損なわれ、結果として複合危機を招く危険すら否定できないとの危機感も表明された。また、東日本大震災の経験を踏まえれば、原子力に限らずあらゆるリスクにしっかり向き合い、準備を行うべきである。自然災害に対する脆弱性、地政学的緊張など国際環境の変化等に対し今から直ちにその準備を開始すべきである。この準備には、制度改革や政策手法の見直し、技術開発など幅広い分野での対応を含む。

原子力への依存を低減させるとすれば、中長期的には、再生可能エネルギーと省エネルギーの2つが重要になる。前者については、固定価格買い取り制度がスタートし、電源として拡大する環境が整いつつある。しかし、原子力を代替するような役割を果たすためには、電力会社間の関係の強化、需要家のエネルギー市場への一層の参加を促すような電力グリッドのスマート化や蓄エネルギーに関す

る技術開発、相応のインフラの整備と電力制度改革等が必要だ。省エネについては、電力供給力不足に伴う節電要請は、既に効率的な日本の産業活動に大きな影響を及ぼす。やや過重とも思われる負担を省エネに担わせていることも事実であり、現実の投資計画を検証するなど実行可能性の検討をしっかりと確認すべきとの指摘もあった。

技術の果たす役割、グローバルに活躍できるエネルギー企業の育成も重要であるとの指摘もあった。水素等を活用した蓄エネルギー、スマートグリッドや CCS(二酸化炭素貯留)の重要性が強調された。企業が技術力を持って世界を舞台に活動するためには、グローバルな情報収集と活用能力も重要であり、国内において制度改革等による環境整備も重要との指摘もあった。また、原子力について、国家の外交や安全保障上の観点から、原子力技術を維持すること、技術の現場を国内に持つておくことの重要性が指摘された。

便利屋フラフラまい進中



部長の検食をいただきます！

昨年の4月より現職に着任しました。院内のセキュリティ管理と環境整備を主に担当しています。仕事の内容は便利屋のようなもので、ある時は院内の電気錠が壊れたのでドライバーを持って直しに行ったり、ある時は会議室のプロジェクターが映らなくなったのでケーブルを持って直しに行ったり、ある時は自転車の置き方が汚いので注意書きを貼りに行ったり、ある時は不審者が敷地内に住み着いているので退去を促す注意書きを貼りに行ったりしました。フラフラと出歩いてばかりでどんな奴だと周りからは思われているかもしれないのですが、実はこうして仕事をしています。最近になると一日一回はどこかに出かけないと落ち着かない体質になってしまいました。こんな風でこの先他の職場に異動してやっていけるのか……疑問に思うこともしばしばですが、他では得難い貴重な経験を積ませてもらっているものと前向きに捉え、日々の業務にまい進しています。



頼れる職場の先輩と

得意ワザ：首を動かすのが得意です。

自分の性格：悠長。

次回執筆者のご指名：高橋悠さん

次回執筆者との関係：悠。名前が一緒です。悠2（ユーツー）なるバンドも組んでいます。

次回執筆者の紹介：悠さんです。バンドのギターです。ピアノもお得意です。

～救援・復興支援室より～

No.16

■救援・復興支援室の活動（8月～10月）

- 8月2日～8月27日…平成24年夏季ボランティア隊の活動
活動場所：岩手県大槌町及び陸前高田市
第1班 8月 2日～ 6日、第2班 8月 9日～13日
第3班 8月23日～27日
- 8月17日～24日…福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア
活動場所：大熊中学校（福島県会津若松市内）
- 9月8日～10月28日…福島県相馬市の学習支援ボランティア
活動場所：相馬市内の応急仮設住宅集会所
活動期間：9月 8日（土）～ 9日（日）、9月29日（土）～30日（日）
10月13日（土）～14日（日）、10月27日（土）～28日（日）
- 9月26日…第15回救援・復興支援室会議
- 10月10日…第4回ボランティア活動報告会
- 10月20日～12月2日…岩手県陸前高田市の学習支援ボランティア
活動場所：岩手県陸前高田市内の小中学校
活動期間：10月20日（土）～21日（日）、11月3日（土）～4日（日）
11月17日（土）～18日（日）、12月1日（土）～2日（日）
- 10月25日…第16回救援・復興支援室会議

■プロジェクト登録研究 85件（2012年3月21日現在）

→「再生のアカデミズム《実践編》」連載中。P13参照

■救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html

■救援・復興支援室

Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線：21750

第7話 分室

遠野ものがたり

救援・復興支援室の遠野分室から、被災地の復興の様子や分室の活動を報告していきます。

「皆さんの血管年齢は？」

岩手県大槌町の仮設住宅集会所で行われた「移動！暮らし保健室」。

被災地支援を行っている登録プロジェクト（仮設まちづくり支援/研究プロジェクト）活動の一環で、仮設住宅での閉じこもりや虚弱化を防止し、団地内のコミュニティ形成を促すことを目的とし、医師による健康教室や実際に機器を使用した健康診断・結果解説及び意見交換を行いました。

当日は、20名以上の方が参加し、ご自身の健康状態を熱心にチェックされていました。

参加者からは、「健康診断結果ではわかりにくい内容や、普段気にしていないストレス状態などもわかり大変良かった」「病院では聞けないような些細な健康相談にも応じて頂いた」と大変好評で、今後も定期的な実施要望もあり、仮設住宅暮らしでの健康への不安及び関心の高さを強く感じました。

私の親戚も参加していました…汗

どんどはれ…

文：赤崎公一

測定結果解説の様子



健康教室の様子



執筆者紹介：救援・復興支援室遠野分室勤務（総合企画部企画課係長）赤崎公一氏。東日本大震災にて実家（岩手県大槌町）が津波で全壊し、家屋・家財すべて流失。昨年7月より、妻と子（当時1歳）とマンションのローンを東京に残し、岩手県遠野市に移住。現在は、被災した母（65歳）と高校卒業以来の同居生活中。連絡先：tohno-kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

■10月イベント情報

皆さまこんにちは。いよいよ秋めいて日が落ちるのが随分早くなってきましたがいかがお過ごしでしょうか。

先月のコミュニケーションセンターでは、「敬老の日」のお祝いに向けたオススメ商品が大好評でした！

☆「敬老の日」プレゼント人気ランキング☆

- 1位: 泡盛「御酒」
陶器ボトル¥4,200(税込み)、ミニボトル¥1,995(税込み)
- 2位: 東大サプリメント「体力式アミノ酸」
¥2,205(税込み)
- 3位: ペーパーウェイト(ルーペ機能付き)
¥8,400(税込み)

このようなイベントを今後も行って参りますのでどうぞお楽しみに！

それでは10月のイベント情報です。

①10月20日(土)

ホームカミングデイ @本郷キャンパス

②10月26日(金)、27日(土)

柏キャンパス一般公開

①は、本郷キャンパスいちょう並木付近でテント出店予定、②は柏の葉キャンパス内にてテント出店予定となっております。皆さま是非遊びにいらして下さい！！

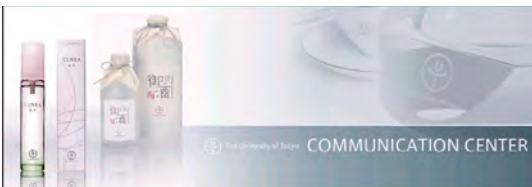
■ご愛読誠にありがとうございました！！



コミュニケーションセンターがオープンして以来約7年間、様々な商品やUTCCで働く学生スタッフの紹介、イベント情報などをお届けしておりましたが、今月号をもちましてコミュニケーションセンターだよりは連載終了となります。

本当に今までありがとうございました！！

また、連載は終了となりますが、コミュニケーションセンターは今まで以上にお客様に喜んでいただけるよう、努めて参りますので今後ともスタッフ共々宜しくお願いいたします！！



担当：UTCC山下



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

This month's

Todai Research

http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/

東大の研究紹介サイト「Todai Research」の情報をお知らせします。興味のある記事はありましたか？ぜひ、サイトをご覧下さい！

Todai Research で検索

Feature Story

今月の特集記事



2012/8/15 大学院工学系研究科

日本の知、空を翔る

東京大学が拓く航空宇宙工学

日本の空を最初に飛んだのは、東京大学教授が開発に関わったグライダーです。以来100年余、さまざまな飛翔技術を開発してきた東京大学は、今、航空機製造ビジネスという、分野の枠組みを超えた課題に挑戦しています。

Research Highlights

最新論文紹介

2012/08/29 分子細胞生物学研究所

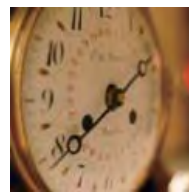


予想外の2ステップ再生法

肝臓の驚異的な再生能力を支える肝細胞の作戦

肝臓は非常に高い再生能力を持っています。マウスの肝臓を70%切除しても、元の重量と機能が復元されます。この驚異的な再生能力は、肝臓の大部分を占める肝細胞が分裂して細胞数を増やすことによって実現していると考えられてきました。しかし、その直接的証拠はありませんでした。

2012/08/15 大学院総合文化研究科



生物時計の周期が約24時間を保つ不思議

温度変化の下で一定に概日リズムを保つメカニズムの発見

ヒトからバクテリアまで、多くの生物は体内に約24時間周期の時計を持っています。「概日リズム」と呼ばれるこの周期は、特定のタンパク質が繰り返す一連の化学反応で生み出されているのですが、実は、ここに数十年来の大きな謎があります。

ご意見・お問い合わせはこちらまで

Mail: kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp Ext: 21045

東大ポータル >> 便利帳 >> 総合企画部 >> 広報課

http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

生物生産工学研究センター

シンポジウム開催のお知らせ

生物生産工学研究センターでは、下記の要領でシンポジウム「植物機能のバイオテクノロジー」を開催いたします。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日時：11月5日（月）13：00～18：00
（18：00より懇談会）

場所：弥生講堂一条ホール（講演）
弥生講堂アネックスセイホクギャラリー（懇談会）

講演内容：

- 13：00 開会の辞 五十嵐 泰夫
（本学生物生産工学研究センター長）
- 13：05 挨拶 長澤 寛道
（本学大学院農学生命科学研究科長）
- 13：10 横田 明穂（奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科）
「植物機能の多面的高度利用」
- 13：40 柳澤 修一（本学生物生産工学研究センター）
「植物転写因子を用いた植物機能の強化」
- 14：10 休憩
- 14：20 福澤 秀哉（京都大学大学院生命科学研究科）
「微細藻類におけるCO₂濃縮機構と代謝工学の可能性」
- 14：50 川合 真紀（埼玉大学大学院理工学研究科／埼玉大学環境科学研究センター）
「植物ストレス誘導性細胞死研究の新展開」

- 15：20 休憩
- 15：40 土岐 精一（農業生物資源研究所）
「偶然から必然へ - 植物における標的遺伝子改変技術の開発 -」
- 16：10 瀬尾 光範
（理化学研究所 植物科学研究センター）
「受容体複合体再構築系を用いた植物ホルモン輸送体の同定」
- 16：40 休憩
- 16：50 馳澤 盛一郎
（本学大学院新領域創成科学研究科）
「植物細胞生物学における画像解析のアプローチ」
- 17：20 田中 良和
（サントリービジネスエキスパート株式会社）
「遺伝子組換え花き植物の開発と商業化」
- 17：50 閉会の辞 五十嵐 泰夫
（本学生物生産工学研究センター長）

参加申込：不要

参加費：無料

懇談会会費：2,000円（当日申し受けます）

主催：東京大学生物生産工学研究センター

照会・連絡先

東京大学生物生産工学研究センター 柳澤 修一

E-mail: asyanagi@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/biotec-res-ctr/>

お知らせ

お知らせ

低温センター

低温センター安全講習会（高圧ガス保安法に基づく保安教育）のお知らせ

液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象とした講習会を開催します。主な対象者は、本郷キャンパスで新たに寒剤（液体窒素・液体ヘリウム）を利用する学生及び教職員です。各研究室の該当者は必ず出席するようにお願いいたします。

【内容】液体寒剤の性質／高圧ガスの安全な取り扱い（液体寒剤・ガスボンベ）／高圧ガス保安法と本学での高圧ガス等の管理について 他

【申込方法】事前申し込み（web）が必要です

<http://kanzai.crc.u-tokyo.ac.jp/kosyu/>

【申込期間】9月3日（月）～10月18日（木）

【開催日時】10月23日（火）15：00～16：30

【場所】理学部1号館 小柴ホール（定員170名）

【問い合わせ先】

低温センター 液化供給部門 内線 22853

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

演習林の広報誌「科学の森ニュース No.59」の発行

「科学の森ニュース」は3ヶ月に1回発行している演習林の広報誌で、9月10日(月)にNo.59を発行しました。演習林の最近の話題を始め、動植物を紹介するシリーズやコラムも載っています。広報センター、農正門、農学生命科学図書館、弥生講堂等で配布している他、演習林のホームページからご覧になれます。

～ 科学の森ニュース No.59 目次 ～

〈トピックス〉

「癒しの森」をイメージ パネル式看板お披露目会
 富士癒しの森研究所
 高校生と考える森林の持続可能な未来
 北海道演習林
 夏休み恒例「高校生のための森と海のゼミナール」を実施しました
 千葉演習林
 生態水文学研究所創立90周年記念シンポジウム

〈クローズアップ〉

東大サステイナブルキャンパスプロジェクト (TSCP)
 東京大学 TSCP 室

〈演習林のイベントダイジェスト〉

〈科学の森の動植物紹介〉
 クヌギ 田無演習林

〈コラム〉

特別天然記念物オオサンショウウオを守る
 生態水文学研究所 岩井紀子

演習林のホームページ

<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/>



お知らせ

環境安全本部、本部労務・勤務環境課

2012年度 東京大学メンタルヘルスセミナー
 ストレスに強い「私」をつくる3つのワーク
 ショップまもなく開催！

毎年、環境安全本部産業医は、本部労務・勤務環境課と共催で全教職員に対しストレス耐性を高めるセミナーを行っており、今年もセミナーを開催いたします。自ら考え、手を動かし、参加者同士が共有することで学びを深めるワークショップ形式です。

勤務場所や業務時間の関係で受講可能な日時がない場合も、ご希望をいただければ、とりまとめて追加開催を検討いたします。まずは受講希望をご連絡ください。



■対象：東京大学教職員（有期雇用教職員含む）

■受講についての注意事項

- ・基礎編・応用編A・Bは連続した内容ですが、いずれかの受講も可能です。
- ・原則として勤務地に近い会場でお受けください。

■申込方法

Web 申込（環境安全本部 HP →産業医 HP Top）
<http://webform.adm.u-tokyo.ac.jp/Forms/2012mhs/>

■問い合わせ先

【申込後の変更等】
 本部労務・勤務環境課（内線）22174/22068
 【講義内容等について】
 産業衛生室（内線）28429
 E-mail: sangyoui-office@umin.org
 <主催>環境安全本部 産業医、本部労務・勤務環境課
 <協力>大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 精神保健学分野

■研修概要

定員：各回 30 名程度（先着順）
 締切：各回 7 日前 17 時まで

基礎編：「私」を知り、コミュニケーション力の向上につなげよう

- 私のストレスへの気付きと対処
- 私の心の“色眼鏡”への気付き

キャンパス	研修日	会場
本郷	10/3（水）14：30 - 16：30	①
本郷	10/12（金）9：30 - 11：30	②
駒場	10/5（金）9：30 - 11：30	④
柏	10/1（月）14：30 - 16：30	⑤

応用編 A：コミュニケーション力を磨き、仕事に生かそう

- 上手な仕事の頼み方と断り方（調整法）
- 職場ですぐできる、リラクゼーション法（簡易版）

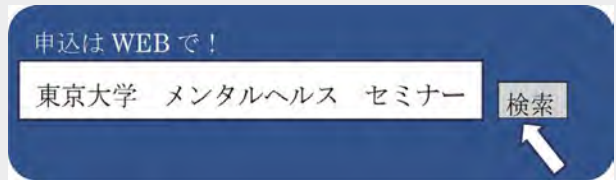
キャンパス	研修日	会場
本郷	10/15（月）14：30 - 16：30	②
本郷	10/25（木）14：30 - 16：30	③
駒場	10/22（月）14：30 - 16：30	④
柏	10/23（火）14：30 - 16：30	⑤

応用編 B：心と体の柔軟性を高め、いきいき仕事をしよう

- 上手な問題解決法（優先順位づけ）
- 職場ですぐできる、リラクゼーション法（詳細版）

キャンパス	研修日	会場
本郷	10/31（水）14：30 - 16：30	③
駒場	11/7（水）14：30 - 16：30	④
柏	11/2（金）14：30 - 16：30	⑤

会場	会場詳細
①	東洋文化研究所 3 階会議室 303
②	総合図書館 3 階大会議室
③	工学部 2 号館 3 階 電気系会議室 1A（33A）
④	教養学部 18 号館 4 階 コラボレーションルーム 3
⑤	物性研究所 6 階セミナー室 612



お知らせ
 本情報基盤課
 「文献管理ツール・クローズアップデー」など
 “情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、文献の探し方・文献管理方法をマスターしましょう！

情報基盤課学術情報チームでは、定期的に、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

10 月は、「文献管理ツール・クローズアップデー」として、東京大学所属者が無料で利用できる「RefWorks」の講習会のほか、同種のツールで利用者の多い「Mendeley」「EndNote」についても提供元から講師を招聘し、セミナーを実施します。

また初心者向けの「はじめての論文の探し方」など、予約不要の各種コースも実施します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※学外からの利用方法はどのコースでも説明します。



■文献管理ツール・クローズアップデー 企画①
 10/2（火）10：30～11：30（備付 PC で実習形式）
 【文献管理ツール初心者のための RefWorks 講習会】
 ※予約優先

データベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成。文献管理ツールはそんな機能を持つ便利なツールです。

これから使ってみようという方向けに、東京大学所属者が無料で利用できる Web 版の文献管理ツール

「RefWorks」(レフワークス)の使い方を説明します。

代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

※文献管理ツール初心者の方はこの回がおすすめです。同日開催のMendeley・EndNoteセミナーと併せてご参加ください。この回のみ参加も可能です。

■文献管理ツール・クローズアップデー 企画②

10/2(火) 13:30～14:30(聴講 or 持込PCで実習可)
【Mendeley 利用セミナー】※予約優先

Webとデスクトップの両方で使える無料ツールの「Mendeley」(メンデレー)を既に使っている方、または他の文献管理ツールを使っている方向けに、Mendeleyの基本機能やソーシャルネットワーク機能など、便利な使い方を、提供元から講師を招聘して講習します。

※本学はMendeley 機関版の契約はしていません。

※この回は、Mendeleyをインストール済み、かつ学内無線LAN設定済みのパソコンをご持参の方のみ実習が可能です。その他の方はセミナー聴講のみとなります。

■文献管理ツール・クローズアップデー 企画③

10/2(火) 15:00～16:30(聴講 or 持込PCで実習可)
【EndNote(ソフトウェア版)利用セミナー】

※予約優先

デスクトップ版の有料ソフトウェア「EndNote」(エンドノート)を既にご利用の方、または他の文献管理ツールを使っている方向けに、EndNoteの基本機能や画像情報・プレゼンテーション資料の管理など、便利な活用法を提供元から講師を招聘して講習します。

※この回は、EndNoteをインストール済み、かつ学内無線LAN設定済みのパソコンをご持参の方のみ実習が可能です。その他の方はセミナー聴講のみとなります。

※説明はWindows版で行います。



■10/11(木) 15:00～16:00(備付PCで実習形式)

【はじめての論文の探し方】※予約不要

「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書・雑誌(東京大学OPAC)、日本語論文(CiNii Articles)、英語論文(Web of Science)の基本的な検索方法を実習します。

■10/24(水) 15:00～16:00(備付PCで実習形式)
【論文投稿シミュレーション: JCRとRefWorksを使って】※予約不要

執筆中のその論文、投稿先はどうやって決めますか?

雑誌によって異なる参考文献リストの書き方、大変だと思いませんか?

雑誌の「インパクトファクター」が、投稿先を決める手がかりのひとつになるかもしれません。参考文献リストの作成にはWeb版の文献管理ツール「RefWorks」を活用してみましょう。文献データの整理～投稿誌の選定～投稿規定に沿った文献リスト自動作成の流れを、2つのツールを使った実習でシミュレーションしましょう。※講習内容の一部が【文献管理ツール初心者のためのRefWorks講習会】と重複します。ご了承ください。

●会場:

【本郷】総合図書館 1階 講習会コーナー 定員17名

●参加費: 無料

◆文献管理ツール・クローズアップデー申込先:

学術情報リテラシー担当 (literacy * lib.u-tokyo.ac.jp)宛に、以下のメールをお送りください。

(*は@に置き換えて送信してください。)

メールのタイトル: 文献管理ツール・クローズアップデー参加希望

本文:

- (1) 参加希望コース名(複数可)
- (2) 氏名
- (3) 身分
- (4) 所属
- (5) 講師への質問
- (6) 利用経験のある文献管理ツールの名称(利用経験の無い場合は「なし」)
- (7) [Mendeley・EndNote参加者のみ] PC持込の可否(※持込PCを使用する文献管理ツール名称を必ず明記してください。持込PCはそれぞれのソフトウェアをインストール済み、かつ学内無線LAN設定済みのPC限定です。)

※文献管理ツール・クローズアップデー以外は予約不要です。直接ご来場ください。

※上記の他に、留学生向け講習会も実施します。

(参照: P26『英語と中国語で講習します! 「留学生向け総合図書館オリエンテーション」(英語)、「留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス」(中国語)

のお知らせ))

★授業・ゼミ・学生グループなどを対象にオーダーメイドで講習します！

論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です（無料）。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでも OK です。

過去の実施例は以下の URL でご覧いただけます。
(<http://www.dlitc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

★ Litetopi メールマガジン発信中！

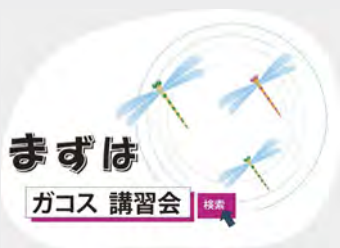
本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。（無料）



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー担当 03-5841-2649（内線：22649）
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp
（*は@に置き換えて送信してください。）
<http://www.dlitc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>
（ツイッター http://twitter.com/gacos_today）



お知らせ

国際本部 日本語教育センター

2012 年度冬学期「一般日本語コース」開講のお知らせ

本センターでは、2012 年度冬学期も「一般日本語コース」を開講します。本学の留学生、外国人研究者の方なら、どなたでも受講できます。多くの方の受講をお待ちしています。



●コース概要

【開講期間】10月29日（月）～2月7日（木）

冬季休暇 12月17日（月）～1月8日（火）

【開講場所】日本語教育センター

（本郷キャンパス・第2本部棟5階、1階）

【内容】2つの系統があります。

- ・「総合日本語」：入門レベル（レベル1）から上級レベル（レベル5）まで。各レベル週3～2コマ。
- ・「テーマ別日本語」：〈漢字〉〈中級会話〉など。週1コマ。

【対象】東京大学の留学生、外国人研究者

* 〈レベル1〉から〈レベル3〉までのクラスと〈漢字〉のクラスは、配偶者も受け付けます。

【受講料】無料。ただし、教科書を使うクラスでは、必要な教科書を各自購入の上、受講してください。

【選考】選考はありません。センターのウェブサイトを受講前のレベルチェックをして、自分でクラスを決めてください。

時間割、教科書等の詳細は、センターのウェブサイトに掲載します。

●申し込みについて

以下は留学生が申し込む場合の情報です。外国人研究者、配偶者については、必要書類、申し込み期間が一部異なりますので、センターのウェブサイトを確認してください。

【申し込みに必要なもの】

- ①受講申込書
- ②写真2枚（4cm × 3cm）
- ③東大発行のIDカード

【申し込み期間】10月4日（木）、5日（金）、9日（火）、10日（水）、11日（木）、16日（火）、17日（水）、13：30～15：30

先着順に受け付け、定員に達したら締め切ります。

【申し込み場所】日本語教育センター

（本郷キャンパス 第2本部棟5階）

●お問い合わせ

申込方法等→日本語教育センター事務（留学生・外国人研究者支援課）内線：22564

授業内容等→日本語教育センター 内線：22563

●なお、上記は、日本語教育センターの最も一般的な「一般日本語コース」のご案内です。センターでは、このほか「集中日本語コース」「学術日本語コース」「短期日本語コース」などの各種コースを提供しています。詳しくはセンターのウェブサイトなどをごらんください。

<Website> <http://www.nkc.u-tokyo.ac.jp/>

<Twitter> <http://twitter.com/TodaiNihongoC/>

<Facebook> <http://www.facebook.com/TodaiNihongoC/>

<General Course -winter 2012-> offered by Center for Japanese Language Education [Nihongo Center]
The Center for Japanese Language Education will be offering General Course. This course can be taken by any international student and foreign researchers at the University of Tokyo, provided that application is made within the specified period. Won't you join us in the Japanese classes at the NIHONGO Center?

● Outline

Term: From October 29 (Mon.) to February 7 (Thu.)

* Winter holiday: From December 17 (Mon.) to January 8 (Tue.)

Location of Class: Center for Japanese Language Education (Adm. Bureau # 2, 5th and 1st floor, Hongo)

Contents: This course is divided into two tracks, <Comprehensive Japanese> and <Specific Japanese>
<Comprehensive Japanese> : Six levels, ranging from introductory (Level 1) to advanced (Level 5). Three or Two times a week (100 minutes each time).

<Specific Japanese> : Classes focused on specific skill areas, such as kanji and intermediate conversation. One session each.

Potential Applicants: International students and foreign researchers at the University of Tokyo.

* Foreign spouses of international students or foreign researchers at the University of Tokyo may also enroll in some classes: <Level 1> to <Level 3> and <Kanji>.

Tuition: There is no tuition fee.

However, you will have to purchase the textbooks yourself for the classes as required.

Selection: There is no selection criterion.

Please determine the level of the course you will take by yourself based on the results of the placement test which is offered on the Center's website.

For further information, such as timetables, textbooks etc., please refer to the Center's website.

● Registration Details

* The following information is specific to foreign students. For details on foreign researchers and spouses, please refer to the Center's website.

Necessary documents for Registration:

(1) Application Forms

(2) 2 copies of photo (4cm x 3cm)

(3) ID card issued by the U-Tokyo

Registration Period:

October 4 (Thu.), 5 (Fri.), 9 (Tue.), 10 (Wed.),

11 (Thu.), 16 (Tue.), 17 (Wed.)

* Applications will be accepted on a first-come-first-served basis until the class becomes full.

Registration Time:

From 1:30 to 3:30 pm during the registration period stated above

Registration Place:

Center for Japanese Language Education (Adm. Bureau # 2, 5th floor, Hongo Campus)

The NIHONGO center provides not only the General Course above but also various courses for international students and foreign researchers – Intensive Japanese Course, Academic Japanese Course and Short-term Japanese Course, etc. Please visit our website and find a course that fits with your schedule and learning needs.

We are looking forward to seeing you in the NIHONGO Center.

<Website> <http://www.nkc.u-tokyo.ac.jp/>

<Twitter> <http://twitter.com/TodaiNihongoC/>

<Facebook> <http://www.facebook.com/TodaiNihongoC/>

お知らせ

本部学生支援課、国際企画課

アジアを代表する4大学の学生合唱団による「第6回ベセトハ合唱祭」の開催

本学の式典奏楽を長く務める音楽部合唱団コールアカデミー、および2009年に新設された音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアの主催により、北京大学、ソウル国立大学、ベトナム国家大学の学生合唱団とのジョイントコンサートが開催されます。

この「ベセトハ合唱祭」は、決して安寧ではない昨今の東アジア情勢にもかかわらず、自国の未来を担う自覚を持った学生たちが、合唱を通じた相互理解と友好をめざして十年来続けているもので、今回は東京での2回目の開催となります。

会場も本郷キャンパスからほど近いうえ、本学の音楽部両合唱団はもとより、音楽特待生を擁する北京大学を

はじめ、音楽的にも出色の名演が期待されます。みなさまぜひ足をお運びください。

[日時] 10月14日(日) 16時開演
[会場] 文京シビックホール大ホール
(東京メトロ後楽園駅直結、都営地下鉄春日駅直結)
[入場券] S席 2,000円、A席 1,500円、B席 1,000円
[曲目] 各国単独ステージ：ポップ・チルコット『小ジャズミサ曲』ほか
4か国合同ステージ：参加国の国語による曲、およびワグナー『タンホイザー』より「大行進曲」
[指揮] 江上孝則、有村祐輔ほか
[伴奏] 東京大学音楽部管弦楽団ほか

お問い合わせや詳細の確認は、音楽部合唱団コールアカデミー(下記)へお願いします。

[メールアドレス] info@chor.jp
[ホームページ] <http://www.chor.jp>
[ツイッター] http://twitter.com/chor_akademie



お知らせ

本部情報基盤課

英語と中国語で講習します! 「留学生向け総合図書館オリエンテーション」(英語)、「留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス」(中国語)のお知らせ

情報基盤課学術情報チームでは、ネイティブ講師による「留学生向け総合図書館オリエンテーション」(英語)、「留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス」(中国語)を開催します。

内容は、レポート・論文作成に役立つ、データベースを使った図書や雑誌論文の検索実習です。

入門的な内容ですので、新入学の留学生に限らず、初心者の方の参加も歓迎します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※留学生のみなさんにもぜひお声かけください。



■ 10/18 (木)

【留学生向け総合図書館オリエンテーション】(英語) “General Library Library Tour in English”

October 18 (Thu.)

15:00 - 15:30 OPAC Course
15:30 - 16:00 Guide to the Stacks
16:00 - 16:30 Library Tour

It is not necessary to attend all 3 courses. Participants can join each course of 30 minutes.

The OPAC Course is an introductory course to online catalogs and e-journals. (This session offers a hands-on approach by using computers.)

The Library Tour will show you not only its rich collections but also materials and facilities provided for you, such as foreign newspapers, foreign TV, and computers.

No advance reservation is required. Free of charge.

Please come to the General Information Desk of the General Library (Hongo Campus) before the scheduled time.



■ 10/26 (金)

【留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス】
(中国語)

留学生論文検索入門指南講座 (使用语言: 中文)

10月26日 (星期五)

第一场 13:10 - 14:10 / 第二场 15:00 - 16:00

講習会进行两场 [内容相同]

講習会主要内容:

- ・ 查找图书所在: 东京大学 OPAC
- ・ 查找杂志论文: 东京大学 OPAC
- ・ 查找主题论文

中文论文: 中国期刊全文数据库 (CNKI)

日文论文: CiNii Articles

英文论文: Web of Science

- ・ 如何从校外链接使用数据库和电子期刊

- ・ 会场: 本郷校区 総合図書館 1F 講習会角
- ・ 无需事先申请・免费
- ・ 定员 17 名 (以到达先后为序)
- ・ 因为参加人数较多, 请尽量提前到达会场。首场 [13:10 - 14:10] 参加者超员时, 将发行第二场 [15:00 - 16:00] 整理券 [排号入场券]。第二场可能会出现仅限持有整理券者入场的情况, 希望大家踊跃参加首场講習会。

詳細は下記のサイトをご覧ください。

(English)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/e/training-e.html>

(中文)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/c/training-c.html>

※上記の他に日本語による各種講習会も実施します。
(参照: P22 『「文献管理ツール・クローズアップデー」
など“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ』)

●お問い合わせ:

学術情報リテラシー担当 03-5841-2649 (内線: 22649)

literacy * lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

(ツイッター http://twitter.com/gacos_todai)

お知らせ

生産技術研究所、大学院総合文化研究科・教養学部

第8回駒場キャンパス技術発表会開催のお知らせ

生産技術研究所ならびに大学院総合文化研究科・教養学部共催の技術発表会を、下記の通り開催いたします。一般講演以外にも以下の様な講演がございます。

「交流講演」では渡辺誠氏、金井誠氏・森田明保氏にご講演いただきます。また、「招待講演」では、加藤博氏、矢野隆行氏、高橋岳生氏にご講演いただきます。

様々な分野の講演内容となっておりますので奮ってご来聴下さい。

また、発表会終了後に懇親会を開催いたしますので併せてご参加ください。

記

【技術発表会】

日時: 10月24日 (水) 9:30 ~ 17:00

場所: 駒場Ⅱリサーチキャンパス

総合研究実験棟 (An 棟)・コンベンションホール

《口頭発表》

「長さスケールを含まない1方程式型サブグリッドスケールモデル」

生産技術研究所 基礎系部門 技術専門職員 小山省司
「警戒区域内での土壌サンプリングと線量」

総合文化研究科 技術専門職員 滝澤 勉

「アバランシェフォトダイオード電子検出器の劣化と回復」

生産技術研究所 基礎系部門 技術専門職員 河内泰三
「ヘリウム回収用配管の設計と施工」

総合文化研究科 技術職員 石坂 彰

「安全衛生管理室のご利用手引き」

生産技術研究所 安全衛生管理室 技術職員 近藤大介

《交流講演》

「垂直配向単層カーボンナノチューブ膜の伝熱実験への応用」

工学系研究科 機械工学専攻 技術専門職員 渡辺 誠
「手動式万能試験機の設計」

工学系研究科 システム創成学専攻

技術専門職員 金井 誠

工学系研究科 システム創成学専攻

技術職員 森田明保

《招待講演》

「先端研における情報系の業務について」

先端科学技術研究センター 広報・情報室
技術専門職員 加藤 博

「分子科学コミュニティに貢献する装置づくり」

大学共同利用機関法人 自然科学研究機構
分子科学研究所 装置開発室 技術職員 矢野隆行
「風を追い、風と共に去りぬー風洞と過ごした38年」
生産技術研究所 人間・社会系部門
技術専門職員 高橋岳生

【懇親会】

日時：10月24日（水）17：30～19：30

会場：駒場Ⅱリサーチキャンパス 総合研究実験棟
（An棟）・コンベンションホール前ホワイエ

会費：1500円

今回は催し物として藤井陽一東大名誉教授（元3部教員）のフルートの演奏を始め、他演奏者の参加も含めた企画も考えております。

是非、この機会にご来聴頂ければ幸いです。皆様のご参加をお待ちしております。

第8回 駒場キャンパス技術発表会実行委員会委員長
片桐俊彦

TEL：03-5452-6143

E-mail：toshi@iis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

附属図書館

平成24年度冬学期総合図書館備付け図書の推薦について

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けております。

つきましては、平成24年度冬学期に向けて下記のとおり図書の推薦をお願いいたします。

記

1 推薦の範囲

- （1）講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象とします。
- （2）その他、学生の教養書としてふさわしいものをご推薦ください。
ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書は除いてください。

2 推薦締切り

講義に密着した図書は、10月31日（水）
その他の図書の推薦は常時受け付けます。

3 推薦方法

総合図書館備付け図書推薦要領によります。

※推薦要領は各部局図書館（室）に備付けております。

4 問合せ先

附属図書館情報管理課選書受入係
内線：22626
e-mail：sen@lib.u-tokyo.ac.jp

* 附属図書館 Web サイト

(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>) の「ニュース」にも「総合図書館備付け図書の推薦について」を掲載いたします。
ご参照ください。

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
24.8.15	東 大作	辞 職（外務省国際連合日本政府代表部参事官）	大学院総合文化研究科准教授
24.8.31	野田 優	辞 職	大学院工学系研究科准教授
24.8.31	古川 勝	辞 職（鳥取大学大学院工学研究科准教授）	大学院新領域創成科学研究科准教授
24.8.31	武山 健一	辞 職	分子細胞生物学研究所附属エビゲノム疾患研究センター准教授
24.8.31	遠藤 薫	辞 職（都市再生機構）	先端科学技術研究センター教授
（採 用）			
24.8.16	新谷 亮	大学院工学系研究科准教授	京都大学大学院理学研究科助教
24.8.16	合田 圭介	大学院理学系研究科教授	
24.8.16	嘉治 美佐子	大学院総合文化研究科教授	外務省大臣官房審議官
24.9.1	塚崎 敦	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター特任講師
24.9.1	山崎 俊嗣	大気海洋研究所教授	産業技術総合研究所
（昇 任）			
24.8.16	横山 朝哉	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科講師
24.8.16	國澤 純	医科学研究所准教授	医科学研究所講師
24.9.1	羽藤 英二	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
24.9.1	潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
24.9.1	尾張 敏章	大学院農学生命科学研究科附属演習林准教授	大学院農学生命科学研究科附属演習林講師
24.9.1	木下 滋晴	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科助教
24.9.1	後藤 康之	大学院農学生命科学研究科准教授	大学院農学生命科学研究科助教
24.9.1	山口 いつ子	大学院情報学環教授	大学院情報学環准教授
（配 置 換）			
24.9.1	川幡 穂高	大気海洋研究所附属地球表層圏変動研究センター教授	大気海洋研究所教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

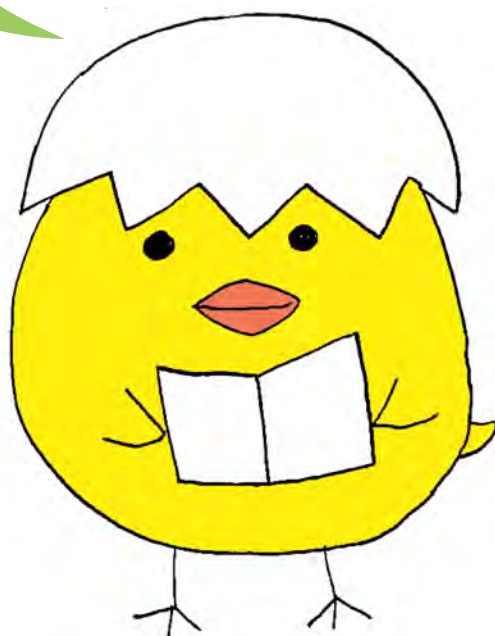
東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

学内広報は次号よりリニューアルいたします！

これまでインフォメーション欄への原稿のご投稿ありがとうございました！インフォメーション欄は10月号より紙面からなくなってしまいますので、今後は全学ウェブサイトへのご投稿をお願いいたします。

なお、ニュース欄への原稿は、12月号までは学内広報にご投稿いただけます。引き続きメールにて原稿をお寄せくださいますようお願いいたします。

1月号以降は、ニュース原稿も全学ウェブサイトでの掲載となります。詳細は追ってお知らせいたします！



10月号～12月号の投稿スケジュール

号数	原稿締切	発行日	配布
1430	9月28日(金)	10月25日(木)	10月31日(水)
1431	11月8日(木)	11月26日(月)	11月30日(金)
1433	12月3日(月)	12月17日(月)	12月21日(金)

* 1月号以降は紙面への投稿はできません。全学ウェブサイトへの登録・掲載となります。詳しくは、便利帳をご参考ください。

【詳しくはこちら】

東大ポータル>便利帳>総合企画部>広報課>「学内広報」への記事提出・投稿

【お問い合わせ先】

本部広報課 kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp (内線：22031)

Contents

特集

- 02 生まれ変わります！学内広報

NEWS

一般ニュース

- 04 産学連携本部
東京大学アントレプレナープラザ開業5周年記念プログラム開催
- 05 本部留学生・外国人研究者支援課
平成24年度第1回「外国人留学生支援基金奨学生及び長島雅則奨学金証書授与式」開催される
- 05 リサーチ・アドミニストレーター推進室
科研費(初級編)「計画調書」説明会を開催
- 06 国際本部 日本語教育センター
日本語教育センター2012年度夏学期「集中日本語コース・学術日本語コース」修了式が行われる
- 07 本部社会連携推進課
高校生のための東京大学オープンキャンパス2012開催
- 08 リサーチ・アドミニストレーター推進室
リサーチ・アドミニストレーター研究会を開催
- 09 総括プロジェクト機構
航空イノベーションフォーラム「YS-11 初飛行50年～日本の航空技術・産業の今と未来～」開催報告

部局ニュース

- 10 大学院工学系研究科・工学部
第3回ご父母のためのオープンキャンパスを開催
- 11 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属牧場にて親子ふれあい教室開催される
- 11 大学院工学系研究科・工学部
テキサス大学 MD アンダーソンがんセンターでの1st Joint Symposium「Bridging Cancer Nanotechnology」開催の報告

コラム

- 13 再生のアカデミズム<実践編> #07
- 14 ひょうたん島通信 第9回
- 15 インタープリターズバイブル vol.62
- 15 ASIAN DIVERSITY No.23
- 16 Crossroad 産学連携本部だより vol.82
- 17 Policy + alt vol.36
- 18 Relay Column「ワタシのオシゴト」第79回
- 18 救援・復興支援室より No.16
- 19 コミュニケーションセンターだより No.92

INFORMATION

シンポ・講演会

- 20 生物生産工学研究センター
シンポジウム開催のお知らせ

お知らせ

- 20 低温センター
低温センター安全講習会(高圧ガス保安法に基づく保安教育)のお知らせ

◆表紙写真◆

学内広報創刊当時の合本(「資料」と最近の学内広報

- 21 大学院農学生命科学研究科・農学部
演習林の広報誌「科学の森ニュース No.59」の発行
- 21 環境安全本部、本部労務・勤務環境課
2012年度 東京大学メンタルヘルスセミナー
ストレスに強い「私」をつくる3つのワークショップまもなく開催!
- 22 本部情報基盤課
「文献管理ツール・クローズアップデー」など“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 24 国際本部 日本語教育センター
2012年度冬学期「一般日本語コース」開講のお知らせ
- 25 本部学生支援課、国際企画課
アジアを代表する4大学の学生合唱団による「第6回ベセトハ合唱祭」の開催
- 26 本部情報基盤課
英語と中国語で講習します!「留学生向け総合図書館オリエンテーション」(英語)、「留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス」(中国語)のお知らせ
- 27 生産技術研究所、大学院総合文化研究科・教養学部
第8回駒場キャンパス技術発表会開催のお知らせ
- 28 附属図書館
平成24年度冬学期総合図書館備付け図書の推薦について

事務連絡

- 29 人事異動(教員)

淡青評論

- 32 第二の故郷

編集後記

今から7年前、着任早々に学内広報のリニューアルを命じられました。いろいろと悩んだ挙句、特集と連載コラムを加えて、ニュースメディアだった学内広報を(ニュース部分を残しつつ)マガジン風メディアに変貌させました。それまでプロの編集・ライターだった僕は、生まれて初めて「読者と寄稿者が同一である同人誌的メディア・学内広報」に接して大いに戸惑った記憶があります。今、思えば、読者と寄稿者が同一であることは双方向性が高まるわけで、草の根記者が寄稿するWEBニュースサイトに近いものがありますね。時代を先取りしていた学内広報と言えなくもないわけです(40年前前から!)

今回のリニューアルは、あの時以来の大リニューアル。「草の根記者の寄稿」に当たるNEWS&INFORMATIONがWEBに移行し、スタンダードな本部発信メディアに生まれ変わります。時代とともにその姿を変えていきながらも、学内広報はまだ健在。東大構成員の皆様には、今後も末永く学内広報を可愛がっていただきたいと、心から願っております。(し)



七徳堂鬼瓦

第二の故郷

空港からサンフランシスコの街を抜けてベイブリッジを渡りパークレーに向かう。そのたびに自分の研究者人生の原点はここにあると思う。原体験である。修士2年の時から13年間過ごしたパークレーは第二の故郷だと思っている。その時の経験と、そこで得た研究者仲間無くして今の自分はない。町全体に漂う限りなく自由な雰囲気と溢れる多様性、大学と研究所で出会った驚くほど優秀な研究者集団、そして彼ら彼女らの徹底した研究第一主義と厳しい評価眼、どれもみな新鮮であった。実験のために通った

スタンフォードの研究所で見た、競争心むき出しで攻撃的な (aggressive) エリート研究者たちの姿も鮮明に記憶に残っている。そこには、今まで見たことのない紛れもなく異なる世界があった。

単なるオヤジのノスタルジアに過ぎないのかもしれない。が、できれば、少しでも多くの東大生が外国で学ぶ、あるいは研究するという経験をしてもらいたいと思う。感受性の豊かな若いうちに「非日常」を体験することで、自らの将来についてより多くの選択肢があることに気づくことができると思うからである。語学力の重要性を理屈抜きに思い知ることができるからである。自分を取り囲んでいる枠の一つや二つを取っ払えると思うからである。前に進むためのモチベーションを得ることができるからである。そして、圧倒的におもしろいからである。外国で生活することは、非日常を体験するための最も有効な手段の一つだと思う。

一方、東大に滞在する留学生や外国人ポストクの数も増加しつつある。研究環境そして生活環境は、彼ら彼女らが故郷とってくれるに値するものになっているだろうか。彼ら彼女らが驚くような優れた研究者は十分にいるのだろうか。外国人を受け入れる柔軟性、多様性は東大に備わっているのだろうか。彼ら彼女らの受ける印象が記憶となり、東大のイメージを作っていく。東大は、彼ら彼女らの第二の故郷足りうるのだろうか。第二の故郷は双方向である。

相原博昭 (大学院理学系研究科・理学部)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1429 2012年9月24日
東京大学広報室

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課
TEL: 03-3811-3393
e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp/>